足立史談

第606号

2018年8月15日

足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
〈30-309〉

もくじ

若田家資料③ 商家と書家・絵師のお付き合い 1P　大のぼりと地域 2P
はい、文化財係です。② 足立の板碑 3P　小右衛門町の家族写真から① 4P

【若田家資料③】

商家と書家・絵師のお付き合い

多田 文夫

千住の薬種問屋、畳屋太右衛門家は薬種「畳屋薬」の取引以外でも多くの交流―お付き合い―があった。一つは「千住の琳派」展で知られるようになった絵師や画家との交流である。前回（六〇四号）触れた建物も茶座敷があるほか庭にも丹精されていたことがうかがわれた。前号以後、畳屋若田家から戦前の庭の写真がご提供いただけた（**上掲写真参照**）。見事な灯籠と垣根が見え、多くのお客様をもてなした商家のたたずまいがうかがえる。

■書家との交流　そこで、交流の一端を、同家に遺された資料から見てみよう。

右下の写真は、隷書で知られた中根半嶺（一八三一～一九一四）の軸である。区内にも作例が多くあり人気のある書家であった。

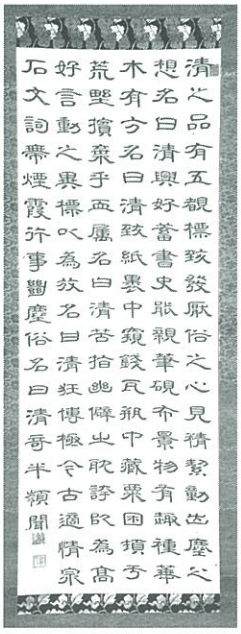
半嶺の子、半湖も書家として知られたが、連名で若田家にハガキで通知している。

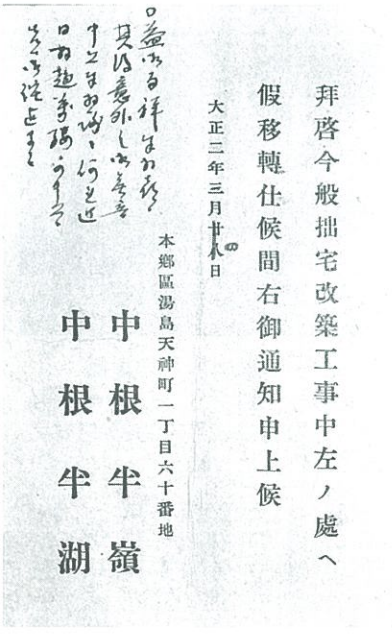
添書には、しばらくの無沙汰を詫びつつ、近々お会いできたらと記している。貴重なのは、このように作者と直接交流していた資料が、いまも伝えられていることである。もう一つ付き合いを物語る資料を見よう。

■絵師のお見舞い　もうひとつ、参考になるのが戦前の当主、太右衛門氏が病気になったときの見舞いの小横帳である。

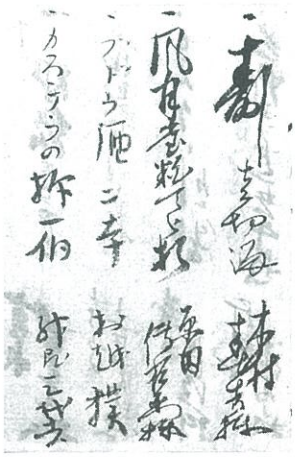
「自明治三十四年十月廿九日　父病気見舞　受納覚」と題する帳簿で、本文四丁、四八件の見舞い品が列記されている。

その中で目を引くのが、村越撲、千住の琳派絵師「村越向栄」の本名が「撲」である。お見舞いの品は「ブドウ酒」二本とある。国産化が始まった時代ながら珍しい見舞い品であった。酒類では「ビイル」（ビール）も見出される。そのほかは、ほとんどは菓子類で、多いのは「粕天羅」（カステラ）、「ビスケツート」（ビスケット）もあった。





中根半嶺の書（軸装）と半嶺・半湖からの転居通知



三行目が琳派絵師村越向栄の見舞い品記事（「病気見舞 受納覚」より）

村越向栄《八橋図屏風》六曲一隻　紙本銀地着色　若田家蔵、当館寄託

線だと一〇〇mという近距離にあった。

村越向栄の代表作は、同家に伝来した《八橋図屏風》（上掲）が知られる。同家には他にも数多くの向栄作品が伝来する。このように日常的な調度で畳屋太右衛門家に花を添えた。先述の「千住与楽会」でも太右衛門家は枢要な会員の一人であった。書家や絵師との交流の様子は千住の商家が、美を取り入れ、普段からその作者とつながる暮らしがあったことを雄弁に語っている。

■塾主　村越撲　向栄の本名である「撲」（読み方未詳）の名前は、家塾「東耕堂」の塾主としても登場する（『開学明細書』）。向栄は慶応三（一八六七）年に塾主となり家塾は明治六（一八七三）年に私立村越学校となった（明治四三・一九一〇年に廃校）。この学校は掃部堤（現墨堤通り）をはさんだ南側の現千住河原町三七－五（現在はマンションになっている）にあった。

■向栄の家　向栄の家は、現在の千住仲町公園（足立区千住仲町二八番）の東側部分にあった。道をはさんで向かいの千住仲町氷川神社は、年に二回、向栄を中心とした美術展覧会「千住与楽会」の会場だったところである（『千住の琳派』）。畳屋太右衛門家までは道なりに二七〇m、直

－つづく－

（当館学芸員）

大のぼりと地域

先月、二九日で終了した「幕末明治の名筆展」では、明治二〇（一八八七）年、山岡鉄舟筆「興野神社祭礼のぼり」を出品していました。今回計測したところ、幅約一・二メートル、長さ約十一メートルということがわかりました。

大のぼりでは、千住四丁目氷川神社ののぼりが知られています。こちらは、宝暦二（一七五二）年の制作で、江戸中期の書家、細井九皐の筆で、「氷川大明神」、幅一・八三メートル（一間）、長さ十五メートル（八・五間）と興野神社のぼりより長大なものです。実物は保存のため現在では複製したものを使用しています。

周辺では江戸川区の篠崎浅間神社（上篠崎一－二二－三一）で、通称「幟祭り」といわれるように幅一・五メートル、二十一・七二メートル級の幟が、神社の参道に十本立てられます。現在では富士山の山開きである七月一日の祭礼日に合わせて、二年ごとに立てられています。のぼりの制作年については確認していませんが、この祭りの起源は江戸時代中期からということです。

祭礼の幟とは、ハレの日の装飾という役割の他、そもそもは立てた竿の先端に清浄な竹、あるいは杉などの常緑樹を立て、神の依り代（降臨の目印）とするものです。回りと比べて目立つように高くするということも大切なことですが、特別に大きくしなくてはいけないということはありません。

特別に大きなのぼりを調製し、祭礼に立てるというのは、そこの土地の人々の祭りにかける心意気を示すもので、江戸中期以降、近郊農村として足立区周辺農村が経済力をもったことによって作ることができるようになったものと考えられます。

当時は高い建物もなく、加えてこのあたりは、平地のため、高いのぼりはことのほか遠くからも目立ち、大きなのぼりを立てる「立てがい」もあったことが

千住四丁目氷川神社の大幟
心棒の長さは25メートルに及ぶ。その昔は、浅草からも見えたという。

「江戸名所図会」 大鷲神社（部分）

想像でき、大きなのぼりが人々に好まれたことがうかがえます。

「江戸名所図会」に描かれた現在の花畑大鷲神社には、祭礼らしく非常に大きな幟が描かれています。江戸の人も多く参拝したこの神社には、この絵に描かれたとおりの大きなのぼりが立てられていたことも考えられます。

布製ののぼりは、長年の間に痛み、古くからのものは残りにくく、また、戦時中は物資が不足したため、古びたものは転用され、滅失してしまったものも数多くあります。また、戦後は人手不足などにより、大のぼりを立てることは難しくなりました。しかし、各地に残された資料を丹念に見ることによって、伝統的な祭りの特徴やその地域の力などを探ることができるのです。

（学芸員　荻原ちとせ）

はい、文化財係です。Vol.2
足立の板碑

第一回となる前回は、未登録の文化財を中心に紹介しましたが、第二回目の今回は、区指定文化財となっている夜念仏供養阿弥陀一尊来迎像板碑（よねんぶつくようあみだいっそんらいごうぞういたび）についてご紹介します（図1）。

■板碑とは

板碑というのは、規格外のものもありますが、おおむね高さが六〇～一〇〇cm、幅が二〇～三〇cm程度の石製の塔婆（とうば）で、鎌倉から室町時代にかけて流行し、路傍やお寺の境内などに多く立てられています。特に、関東や東北に多くみられます。

塔婆は、お盆やお彼岸、法事などの際、お墓に立てる木製の板（板塔婆）として知られています。東京では七月にお盆を迎える家庭も多いですが、全国的には八月がお盆の時期なので、塔婆を目にする機会も多くなります。

塔婆は、もともと古代インドのサンスクリット語「ストゥーパ」に「卒塔婆（そとば）」という漢字をあてたものを略したもので、仏の遺骨を納めた仏塔を意味します。つまり、現在知られている板塔婆は、仏塔を簡略化したものなのです。板塔婆は、平安時代末の絵巻に描かれており、早くから日本に存在していました。少し遅れて登場する板碑も、卒塔婆の一種といわれています。

■足立区の板碑

足立区には、四〇〇基以上の板碑が残されていますが、ほとんどは武蔵型板碑に分類されます。武蔵型板碑の特徴は、緑泥片岩（りょくでいへんがん）という石で作られていることです。この石は埼玉県の秩父地域や埼玉県比企郡小川町などが産地として知られており、水運を利用して各地に輸送されました。足立区の板碑もこうした水運を通じて輸送されてきたものと考えられます。

足立区の板碑は、東部に少なく、西部に多く残されています。足立区の東部は、現在の中川流域が低湿地帯となっており、江戸時代以降の新田開発によって開かれた地域でした。一方、区の西部は比較的高台が多く、江戸時代以前から開発が進んでいました。こうした足立区の特徴が板碑

図1

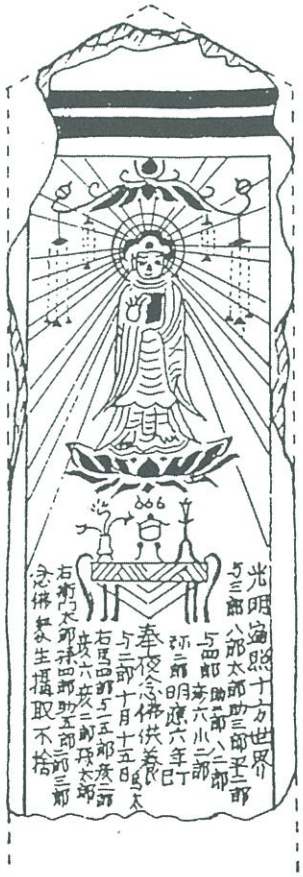


図2

の分布にも反映されているのです。

■夜念仏供養阿弥陀一尊来迎像板

今回ご紹介する「夜念仏供養阿弥陀一尊来迎像板碑」（以下、来迎像板碑と略す）は、明応六年（一四九七）十月十五日に作られたもので、現在は郷土博物館に所蔵されていますが、もともとは伊興にあったものです。下部が欠けていますが、全体的に残り具合がよく、残っている部分は、高さ八三・五cm、幅三一・五cm、厚さ三cmです。

彫刻されている部分を絵図化したものが図2ですが、これをみると、蓮の上に見事な阿弥陀仏が刻まれており、放射状の光が荘厳しているのがよくわかります。また、阿弥陀仏の前には机が置かれ、左から華瓶（けびょう）、香炉、燭台が並んでいます。板碑は、歴史的価値が高いだけでなく、こうした彫刻の見事さから、美術品としても高い価値を有しています。

そして、机の下の中央には、「奉夜念仏供養」、その左右には、この板碑を立てた二十一人の名が記されています。「夜念仏供養」がどういったものなのか詳細は不明ですが、おそらく満月の晩に人々が集まって念仏を唱えたのでしょう。こうした集まりは、村の人々の結束を強める上でも重要なことで、一種のイベント的な側面がありました。そして、板碑を造るというのは、かなりの費用が掛かるため、当時は、多くの人が集まって、費用を出し合っていました。こうしたことを通じて、村の結束を深めていったのです。

■おわりに

今回ご紹介した板碑は、収蔵庫の中に保管されていますが、立てられてから四〇〇～八〇〇年近い時を経た現在もなお同じ場所に立っている板碑も区内には多くあります。皆さんの身近に何気なく立っている板碑は、長い間風雪に耐え、足立の人々の歴史を見守ってきたのです。今度、板碑を見つけたら、そうした板碑の歴史に思いを馳せてみると、きっと面白いのではないでしょうか。

（文化財係　学芸員　佐藤貴浩）

小右衛門町の家族写真から1

二人の女の子

昭和十二年ごろ

夏らしい元気な服装の少女が二人、ひまわりに背比べするようにたたずんでいます。足元は右の子が草履、左の子が下駄を履いています。

この写真は現足立区梅島二丁目―当時は小右衛門町―にお住まいだった金井富江さん（旧姓池田さん。昭和六年生まれ。）がお持ちの昭和十二～三年ごろの写真です。

池田家は昭和初年頃に小右衛門町の新築の家に越してきました。お父さんは無線技師でした。この頃から足立は会社や工場の勤め人の住宅地として急速に発展していきました。農村と住宅地という二つの性格が混在する時代のはじまりでした。金井さんの写真から、住宅地としての始まりの頃を振り返ります。

＊　＊　＊

写真に写っているのは子供時代の富江さん（背の高い方、右側）とご近所の農家のお子さんでキヨちゃんとのこと。ちょうどご自宅の前の道で撮影された一枚です。当時、この道のまわり見渡すかぎり水田だったそうです。池田家はキヨちゃんのお宅と仲良くしていたそうです。

＊　＊　＊

金井さんから博物館にご自身が子どもから学生時代の古い写真をご提供いただきました（画像データをとって保存）。

公開にあたり富江さんに当時を振り返ってメモや手記を添えていただき、それを元に、ある家族―池田家―が記録した戦前のようすを連載でお届けします。

―つづく―

（金井富江さん写真提供）

〈再生紙を使用しています〉